### 黑岩 涙香

くろいわ るいこう 1862-1920



来「聞記者、評論家、翻訳家。本名周六。別名は黒岩大、香骨居士ほか70以上。1882年より『都新聞』などの主筆を歴任した。88年イギリス人ヒュー・コンウェイ原作の『法廷の美人』を新聞連載し、大きな反響を得た。涙香調の翻訳は一世を風靡し、他の新聞も海外探偵小説の翻訳を掲載するようになった。89年には創作探偵小説『無残』を発表。翻訳は探偵小説だけでなく、大デュマ『巌窟王』(1905)、ユゴー『噫無常』(06)などがある。自分の好みに合った原書を選び、他編の筋を接合したり、人名を日本名にしたりするなど独自の翻訳を行った。

1886-1965

/ 説家。『刺青』(1910発表)などが永 井荷風に絶賛され、文壇の寵児となる。『秘 密』(11発表)など早くから探偵趣味の作 品を発表しており、『白昼鬼語』(18)で は暗号解読や死体処理などのトリックが盛り 込まれている。『途上』(20)はプロバビ リティの犯罪を扱った作品として、乱歩がそ の独創性を絶賛した。乱歩や横溝正史など、 後続の作家に多大な影響を与え、探偵小説中

<作家紹介>

# 幸田露伴

こうだ ろはん 1867-1947



/ 説家、随筆家、考証家。1889年刊行の 『風流仏』で文壇的地位を得る。『五重塔』 (91-92発表)など、男性的文体で書かれた理 想主義的な作品で、尾崎紅葉と並ぶ人気作家と なった。初期の作品から探偵趣味が垣間見えて おり、『是は是は』(89発表)では詐欺を描き、 翻案風の『あやしやな』(89発表)では理化学 的な毒殺トリックを扱っている。黒岩涙香『無 残』とともに、最初期の創作探偵小説として重 要である。



興の祖と呼ばれる。

<作家紹介>

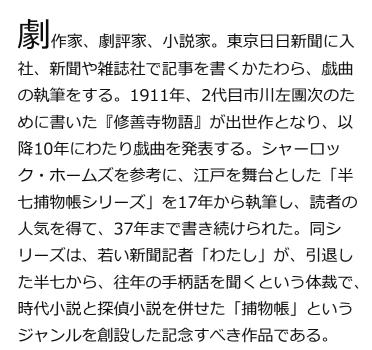
#### 鏡花

いずみ きょうか 1873-1939

/ 説家。ほとんどの作品が叙情的な唯美小説や怪奇幻想小作品だが、初期の作品には探偵趣味の作品も多い。『活人形』(1893)は、黒岩涙香の翻案探偵小説の売れ行きに目をつけた春陽堂が、尾崎紅葉に企画を持ち込み、硯友社一派が書き上げた探偵小説叢書の一冊である。頬に三日月の傷跡を持つ探偵倉瀬が囚われの美女を救出するという草双紙風探偵小説となっている。

### 岡本 綺堂

おかもと きどう 1872-1939



<作家紹介>

# 角田 喜久雄

つのだ きくお 1906-1994

/ 説家。東京府立第三中学校在学中の1922年、処女作『毛皮の外套を着た男』が『新趣味』の懸賞に2等当選する。就職後も探偵小説を書き続け、さらには時代小説、伝奇小説なども発表した。戦後は本格推理小説に情熱を燃やし、横溝正史と並んで戦後の探偵小説界をいち早くリードした。



#### 戸川 乱歩

えどがわ らんぽ 1894-1965

プ 説家、評論家。筆名は、ミステリの始祖エドガー・アラン・ポーに由来する。様々な職に就くが長続きせず、失業中の1922年『二銭銅貨』『一枚の切符』を『新青年』に送りつけ、その高い完成度で森下編集長を驚かせた。25年、明智小五郎を登場させた『D坂の殺人事件』『心理試験』の好評により、作家専業を決意して上京する。戦中は作家活動をほぼ全面的に禁止された。戦後は、創作活動以外の活躍が顕著で、探偵作家クラブを結成、海外探偵小説評論『幻影城』(51)執筆、ハヤカワ・ミステリなどの叢書刊行にも助力し、江戸川乱歩賞を制定して新人作家の育成に尽力した。

<作家紹介>



#### 智 三郎

こうが さぶろう 1893-1945

/ N説家。農商務省臨時窒素研究所の技師をするかたわら、1923年『新趣味』の懸賞に応募した処女短編『真珠塔の秘密』が1等に当選してデビューした。科学者の知識を生かして、理化学トリックを使った作品が多い。35年には『ぷろふいる』誌上にてパズル性を重視する立場を打ち出し、文学派の木々高太郎と論争を展開した。

# 小酒井 不木

こざかい ふぼく 1890-1929

小説家。東京帝国大学医科大学を卒業後、東北帝国大学助教授となるが、病気のため退職。 医学の知識と探偵小説的な主題を組み合わせた エッセイや評論を執筆するようになる。1925 年からは創作も手がけ、医学の専門知識を駆使 した作品が多い。『新青年』を舞台に推理小説、 翻訳、評論などを通じて推理小説の普及に貢献 した。



了 于吃灾

おおした うだる 1896-1966

小説家。農商務省臨時窒素研究所の技師で、職場の先輩である甲賀三郎が新進探偵作家として活躍を始めたのに刺激を受け、1925年処女短編『金口の巻煙草』を『新青年』に発表した。謎解きの面白さよりも、犯罪心理や犯行動機を重視する犯罪小説的な傾向が強い。

<作家紹介>

# 城昌幸

じょう まさゆき 1904-1976

/ 説家、詩人。高踏派の詩人として出発する。 詩作は城左門名義、推理小説は城昌幸名義で発 表している。1925年『探偵文芸』『新青年』 に探偵小説を発表し、日夏耿之介の「奢灞都 (サバト)」同人となり、31年『文芸汎論』を創 刊。本格的探偵小説ではなく、幻想や怪奇を得 意とした。36年からは時代小説も発表している。



<作家紹介>

辺 温

わたなべ おん 1902-1930

/ 説家。大学在学中からシナリオの執筆を開始、1924年映画シナリオ懸賞に入選。小山内薫に師事し、『少女』(25発表)を執筆。27年博文館に入社、『新青年』編集のかたわら掌編ながら強烈な印象を残す作品を次々と発表。30年谷崎潤一郎宅への原稿催促の帰路、踏切事故でわずか27歳の若さで死去。

### 牧逸馬

まき いつま 1900-1935

/ 説家。別名、林不忘(はやしふぼう)、谷譲次。1917年中学を中退、翌年渡米し、各地を放浪して暮らす。25年『新青年』にアメリカの日系移民を主人公としためりけん・じゃっぷものの第1作『ヤング東郷』を谷譲次の名で発表。さらに林不忘の名で隻眼隻手の剣豪『丹下左膳』(27-34)、牧逸馬の名で『舞馬』(27発表)などの探偵小説の執筆と翻訳を行った。



#### 技 史郎

くにえだ しろう 1888-1943

**小**説家。大阪朝日新聞社の記者を経て、大阪松竹座の座付き作者となる。病気療養中の生活費捻出のため、大衆文学の創作を始めた。『蔦葛木曾桟(つたかずらきそのかけはし)』(22-26),『神州纐纈(こうけつ)城』(25-26)などの伝奇小説を多数発表、特異な作風によって人気を得た。初期の作品には探偵小説も多い。

<作家紹介>

# 海野十三

うんの じゅうざ 1897-1949

小説家。本名佐野昌一、別名丘丘十郎。逓信省電気試験所技師の仕事のかたわら、本名で科学雑誌に読み物記事を、1928年には海野名義で『電気風呂の怪死事件』を『新青年』に発表して探偵文壇にデビューした。理化学的トリックの探偵小説と、SF、軍事スパイ小説などを発表した。戦中は海軍報道班員としてラバウルに赴任。終戦後は、初めは丘名義で執筆していたが、後に海野名義を復活させた。



<作家紹介>

### 尾四郎

はまお しろう 1896-1935

/ 説家。宮内省侍医加藤照麿の4男。コメディアン古川緑波の兄。男爵家に生まれ、1918年枢密院議長浜尾新の養子となった。検事、弁護士を務め、29年処女短編『彼が殺したか』を『新青年』に発表。長編第1作『殺人鬼』(32)はヴァン・ダイン風の重厚な本格もので好評を得た。以後、『鉄鎖殺人事件』など本格推理小説を書いた。

### 大阪 圭吉

おおさか けいきち 1912-1945

/ 説家。1932年、甲賀三郎の推薦で、名探 偵青山喬介の登場する『デパートの絞刑吏』を 『新青年』に発表。初期の作品は論理的な謎解 きを重視するものだったが、38年を境にユーモ アもの、スパイ小説、捕物帳にも手を染める。 太平洋戦争激化に伴い43年応召され、終戦の年 に戦地ルソン島で病死した。



くにえだ しろう 1888-1943

**小**説家。大阪朝日新聞社の記者を経て、大阪松竹座の座付き作者となる。病気療養中の生活費捻出のため、大衆文学の創作を始めた。『蔦葛木曾桟(つたかずらきそのかけはし)』(22-26),『神州纐纈(こうけつ)城』(25-26)などの伝奇小説を多数発表、特異な作風によって人気を得た。初期の作品には探偵小説も多い。

<作家紹介>

### 木々高太郎

きぎ たかたろう 1897-1969

小説家。本名林髞(たかし)。筆名は本名の字画を分解したもの。1918年慶應義塾医学科に入学、後に同大学の教授となる。海野十三に勧められて処女短編『網膜脈視症』を『新青年』に発表した。医学的知識と、ロマンティシズムは多くの作品に共通して見られる。探偵小説を芸術まで高めなければならぬという「探偵小説芸術論」を唱え、その趣旨を生かした作品として長編『人生の阿呆(あほう)』(36)を発表して、推理小説としては初めて直木賞を受賞。謎解き要素を重視する甲賀と対立した。



<作家紹介>

#### 生 十蘭

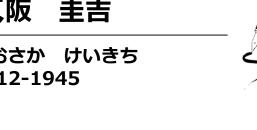
ひさお じゅうらん 1902-1957

プ 説家。別名谷川早など。上京して岸田 国士に師事し、『骨牌遊びのドミノ』 (1929)を発表。36年に久生名義で、殺人 事件の容疑者がお互いに疑心暗鬼にとらわれ ながら犯人を追及する『金狼』を発表。谷川 名義で『顎十郎捕物帳』(40)『平賀源内 捕物帳』(40?)といった、戦前には珍し いトリッキーな本格推理連作を発表。時局の 変転とともに探偵小説の執筆は減少し、戦後 の作品も現代小説、時代小説、ノンフィク ションに重心が置かれた。

<作家紹介>

### 大阪 圭吉

おおさか けいきち 1912-1945



/ \ 説家。1932年、甲賀三郎の推薦で、名探 偵青山喬介の登場する『デパートの絞刑吏』を 『新青年』に発表。初期の作品は論理的な謎解 きを重視するものだったが、38年を境にユーモ アもの、スパイ小説、捕物帳にも手を染める。 太平洋戦争激化に伴い43年応召され、終戦の年 に戦地ルソン島で病死した。



くろいわ じゅうご 1924-2003

/ 八 説家。証券会社調査士、業界紙記者な どのかたわら懸賞に応募、1960年『青い花 火』が佳作に入選、『背徳のメス』(60)で 直木賞受賞。社会派推理小説の旗手として注 目を浴びた。次第に風俗性を強め、推理作品 の執筆は減っていった。自伝的作品や、古代 史を題材とした歴史小説も執筆し、史料と文 献が乏しい古代史のなかで、古代史ロマンと もいうべき歴史小説の新分野を開拓した。

<作家紹介>

# 木々

きぎ たかたろう 1897-1969



**/ | \**説家。本名林髞(たかし)。筆名は本名の 字画を分解したもの。1918年慶應義塾医学科 に入学、後に同大学の教授となる。海野十三に 勧められて処女短編『網膜脈視症』を『新青 年』に発表した。医学的知識と、ロマンティシ ズムは多くの作品に共通して見られる。探偵小 説を芸術まで高めなければならぬという「探偵 小説芸術論」を唱え、その趣旨を生かした作品 として長編『人牛の阿呆(あほう)』

(1936) を発表して、推理小説としては初め て直木賞を受賞。謎解き要素を重視する甲賀と 対立した。



ひさお じゅうらん 1902-1957

**/ | \**説家。別名谷川早など。上京して岸田 国士に師事し、『骨牌遊びのドミノ』 (1929) を発表。36年に久生名義で、殺人 事件の容疑者がお互いに疑心暗鬼にとらわれ ながら犯人を追及する『金狼』を発表。谷川 名義で『顎十郎捕物帳』(40)『平賀源内 捕物帳』(40?)といった、戦前には珍し いトリッキーな本格推理連作を発表。時局の 変転とともに探偵小説の執筆は減少し、戦後 の作品も現代小説、時代小説、ノンフィク ションに重心が置かれた。

# 横溝正史

#### よこみぞ せいし 1902-1981

小説家。1921年『恐ろしき四月馬鹿』が『新青年』の懸賞に入選。26年に博文館に入社し、『新青年』『文芸倶楽部』『探偵小説』の編集長を務めるかたわら、創作や翻訳を発表。戦時中、カーを読み、尋問形式・捜査活動に終始しない謎解きの存在を知る。45年岡山県に疎開。終戦後、同地を舞台にした長短編を続々と発表。名探偵金田一耕助初登場となる『本陣殺人事件』(46)は雪の密室殺人を描いたもの。続く『蝶々殺人事件』(47)『獄門島』

(48) で、本格派の第一人者としての地位を確立。64年を最後に休筆していたが、70年代になると文庫や角川映画によるリバイバル・ブームに応える形で再び筆を取った。

<作家紹介>

### 島田一男

しまだ かずお 1909-1996

小説家。大学を転々とするが、どこも卒業せず、大連市役所勤務を経て、1931年満洲日報社に入社。社会部記者や従軍記者を勤める。47年『宝石』短編懸賞に『殺人演出』が入選、翌年には人気作家となった。第1長編『古墳殺人事件』(48)など、初期にはトリックへのこだわりがあったが、次第に軽快な文章を生かしたテンポのいい物語で独自の作風を確立した。アクション、怪奇小説、満州を舞台にした作品、通信記者、町医者、女性警官、公安調査官、役者、ツアー・コンダクターなど多彩なシリーズ・キャラクターが特徴的。



#### 田風太郎

やまだ ふうたろう 1922-2001

/ 説家。生家は代々医者の家系で、東京医科大学卒。大学在学中の1946年、『宝石』の第1回短編懸賞に入選した『達磨峠の事件』でデビュー。戦後の世相を背景としながら人間心理の綾を鋭く突いた問題作を発表。『眼中の悪魔』『虚像淫楽』(ともに48発表)の2編で49年の探偵作家クラブ賞を受賞。59年の『甲賀忍法帖』以降、異色の時代小説忍法帖シリーズ、幕末や明治など幅広い作品を発表した。

<作家紹介>



#### 影 丈吉

ひかげ じょうきち 1908-1991

/ 説家、翻訳家。1924年、アテネ・フランセと川端画学校に入学。卒業後、フランスに遊学、43年に応召して近衛捜索連隊に入隊。49年『宝石』の懸賞に『かむなぎうた』が入選しデビューとなる。隙のない文章で構成され、推理小説と純文学の境界線上に位置するような作品が特徴。語学力を生かし、創作のかたわらシムノン『メグレと老婦人』、ルルー『黄色い部屋の秘密』などの翻訳も行っている。

<作家紹介>

### 土屋隆夫

#### つちや たかお 1917-2011

/ 説家。1949年『宝石』の懸賞に『「罪ふかき死」の構図』が入選。論理的な謎解きの面白さを重視する本格派で、『危険な童話』(61)、『影の告発』(63)などで論理性と文学性の融合を目指した。60年代後半からは、芥川龍之介などの文学者を題材にした作品もある。



# 鮎 川 哲也

#### あゆかわ てつや 1914-2002

プ 説家。本名、中川透。那珂川透、中川淳一、宇多川蘭子など10以上の別名がある。1948年ごろから『ロック』や『宝石』に怪奇小説や本格ものが入選。56年、講談社の作品公募に、鬼貫警部が鉄壁のアリバイに挑む『黒いトランク』が入選し、作中人物の姓を借りた鮎川哲也という筆名が生まれた。アリバイ崩しの本格推理の第一人者として評価された。創作以上にアンソロジーの編集と歴史に埋もれた幻の作家を探訪する仕事にも熱心であった。90年には東京創元社主催の鮎川哲也賞が制定された。

<作家紹介>

### 天城 —

あまぎ はじめ 1919-2007



小説家、理学博士。大阪教育大学名誉教授。1947年、短編『不思議の国の犯罪』でデビュー。初期は、哲学科無給副手摩耶正を探偵役に、密室を中心とする不可能犯罪ものの優れた短編を発表。極めて論理的で、且つ逆説と風刺に満ちており、チェスタトンを彷彿とさせる。その後創作から遠ざかったが、定年退官後、鉄道もの、アリバイものの短編を発表。作風の変化に伴い、探偵役も超人的な名探偵摩耶正から、ワトソン役を務めていた島崎警部に変わっている。



#### 安基

さかぐち あんご 1906-1955

/ 説家。1931年『風博士』を発表し文壇の注目を浴びる。戦中、探偵小説の犯人当てゲームに興じ、日本で発行されたほぼ全部の探偵小説を読むに至った。46年、『堕落論』『白痴』を発表、一躍時代の寵児となる。その一方で、47~48年にはフェアプレイを実践した探偵小説『不連続殺人事件』を発表。暗号を扱った『アンゴウ』(48発表)、明治を舞台とした『安吾捕物帖』(53-54)などがある。

# 高木 彬光

#### たかぎ あきみつ 1920-1995

/ 説家。幼少期、乱歩や『新青年』に熱中した。1943年中島飛行機に入社したが、終戦で失職。47年占師の勧めで小説を書き始め、長編『刺青殺人事件』を書き上げ、乱歩に直接送って認められ、48年に刊行された。初期の作品では名探偵神津恭介を起用、本格派の大型新人として活躍を印象付けた。社会派の台頭期には積極的に作風転換を図り、歴史ミステリや裁判ものなども手掛けた。



木 悦子

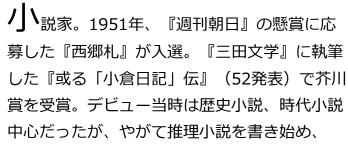
にき えつこ 1928-1986

√ 説家。胸椎カリエスのため、幼少期から ベッドと車椅子での生活を送る。自宅療養のか たわら、童話を書くようになり、大井三重子名 義で100編にのぼる作品を発表。57年には仁木 兄妹の活躍する長編『猫は知っていた』が乱歩 賞として刊行された。軽快な文章と作者の境遇 も話題を呼び、ベストセラーとなる。松本清張 とともに推理小説ブームの牽引役となった。

<作家紹介>

# 松本清張

#### まつもと せいちょう 1909-1992



『点と線』『眼の壁』(58)がベストセラーとなる。汚職や手形詐欺など、社会性のある犯罪や動機を取り上げて社会派推理小説といわれた。現実性を重視したトリックや倒叙的手法が特徴的。また、現実に起こった帝銀事件などのノンフィクション、犯罪小説、古代史ミステリ、評伝など、執筆範囲は多岐にわたる。



<作家紹介>

上 勉

みずかみ つとむ 1919-2004

小説家。家が貧しかったため寺に入るが耐えられず還俗、新聞記者、映画配給公社員など様々な職業を経る。松本清張の『点と線』に刺激を受け、長編推理小説『霧と影』(59)、『飢餓海峡』(63)など、社会性豊かな作品を矢継ぎ早に発表し、清張に続く社会派推理小説の旗手として脚光を浴びた。『雁の寺』(61発表)で直木賞受賞。やがて京都、北陸などの地方の名も知れぬ庶民の宿命を描く耽美的な世界に傾斜、推理小説から離れていった。

# 都筑道夫

つづき みちお 1929- 2003

/ 説家。戦後さまざまな筆名で時代小説、探 偵小説などを発表。翻訳家に転じ、『エラリ イ・クイーンズ・ミステリ・マガジン』の編集 長を務める。1961年『やぶにらみの時計』で ミステリ作家として再デビュー。ミステリの型 式を破壊するような凝った作品を次々に発表し、 独自の地位を築いた。本格ミステリの捕物帳 『なめくじ長屋捕物さわぎ』(69-97)、自称詩 人の外国人探偵キリオン・スレイ・シリーズ、 安楽椅子探偵の退職刑事シリーズなどがある。



なかい ひでお 1922-1993

小説家。角川書店などで主に短歌誌の編集に携わったのち、退職、小説の執筆に専念する。 1962年塔晶夫名義で『虚無への供物』の前半部分を乱歩賞に応募。64年後半を追加し完全版が刊行される。因縁深い旧家で起こる連続殺人を扱うペダンティックな推理小説である。小栗虫太郎『黒死館殺人事件』夢野久作『ドグラ・マグラ』とともに三大奇書と称される。以降はミステリを執筆することはなかった。

<作家紹介>

### 西村京太郎

**にしむら きょうたろう** 1930-



(『天使の傷痕』と改題して出版)で乱歩賞を 受賞し、本格的な作家生活に入った。デビュー 当時は社会派的な傾向が強かったが、スパイ小 説、近未来小説など1作ごとに作風の異なる作 品を発表した。78年には十津川警部を主人公に した鉄道ものの第1作『寝台特急(ブルートレ イン)殺人事件』を刊行、折からの鉄道ブーム と相まって史上空前のトラベル・ミステリ・ ブームを作りだした。 <作家紹介>



#### 藤 栄

さいとう さかえ 1933-

小説家。横浜市役所勤務のかたわら懸賞小説に応募。1966年に『殺人の棋譜』で乱歩賞をうけ、47年作家生活に入る。公害、旅行、将棋、歴史と幅広い題材を駆使して、本格推理、社会派推理の作品を多数発表。社会派と本格ものとの融合を目指した。その他の作品に『奥の細道殺人事件』『Nの悲劇』『水の魔法陣』など。

## 赤川 次郎

あかがわ じろう 1948-

プト説家。1975年ごろから新人賞に投稿をはじめ、76年『幽霊列車』がオール讀賣推理小説新人賞を受賞。作風の特色は軽妙なプロットとユーモラスな語り口にあり、推理小説の基本的なテーマである殺人を扱っても、作品全体の印象が重苦しいものにならないところが斬新といえる。82年からは毎年20冊前後の新刊を出版した。三毛猫ホームズ、吸血鬼はお年ごろ、三姉妹探偵団など、シリーズは主要なものだけでも10を越す。



うちだ やすお 1934-

/ 説家。コピーライターをしていた1980年、 最初の長編『死者の木霊』を自費出版。82年には 浅見光彦初登場となる『後鳥羽伝説殺人事件』、 『遠野殺人事件』(83)で旅情ミステリの作風を確 立。トリックには拘泥せず、プロットの妙で謎解 きを展開し、平明な文章と的確な人物描写で人気 を得る。

<作家紹介>

# **泡**坂 妻夫

あわさか つまお 1933-2009

 対・説家。紋章上絵師の家業を継ぐかたわら、 邪宗門奇術クラブに入会、奇術を扱った作品も 多い。1976年『DL2号機事件』で幻影城新人賞 佳作。貴公子的風貌の飄々とした名探偵亜愛一郎が登場する。文庫サイズの本そのものにト リックが仕掛けられた『しあわせの書』(87)、 袋とじ装丁を利用して短編小説を長編小説の中 に溶け込ませてしまう『生者と死者』(94)など 凝った作品も多い。



<作家紹介>

本 薫

くりもと-かおる 1953-2009

/ 説家。1976年幻影城新人賞評論部門の 住作に入選、78年には作者と同名の栗本薫 クンが活躍する『ぼくらの時代』で乱歩賞受 賞、80年には名探偵伊集院大介が登場する 『絃の聖域』で吉川英治文学新人賞を受賞。 警察小説、全100巻の『グイン・サーガ』シ リーズ、伝奇時代小説など多彩な作品を発表。

# 連城三紀彦

#### れんじょう みきひこ 1948-2013

/ 説家。1978年『変調二人羽織』が幻影城 新人賞に入選。卓抜な心理描写と極めてトリッキーなプロットを特徴とする抒情性に富んだ文 体で探偵小説と恋愛小説の融合を目指した花葬 シリーズは好評を得る。純粋な恋愛小説にも執 筆の幅を広げ、『恋文』(84)で直木賞を受賞し た。



たけもと けんじ 1954-

小説家。1978年『幻影城』に長編連載『匣の中の失楽』でデビューする。このアンチ・ミステリの巨編は夢野久作、小栗虫太郎、中井英夫に続く「第4の奇書」として熱烈な支持を得た。その後、大脳生理学者須堂信一郎やIQ208の天才少年牧場智久らが探偵として登場するゲームを題材にした3部作や、現代日本推理文壇の主要人物が実名で登場する『ウロボロスの偽書』(91)などの作品がある。

<作家紹介>

# 島田荘司

しまだ そうじ 1948-



プ 説家。1980年に乱歩賞最終選考に残り、翌年『占星術殺人事件』と改題の上刊行されたこの作品は本格ミステリ・ファンの熱烈な支持を得た。続く第2長編『斜め屋敷の犯罪』(82)も同じ名探偵御手洗潔が登場する。『死体が飲んだ水』(83)は社会派的スタイル、『寝台特急「はやぶさ」1/60秒の壁』(84)は吉敷竹史刑事を主人公にしたトラベル・ミステリ風の作品である。87年には綾辻行人のデビューに際し熱烈な推薦文を執筆。以降、いわゆる新本格作家を次々とデビューさせ、批判に対し本格擁護の論陣を張った。



井 潔

かさい きよし 1948-

小説家、評論家。新左翼系政治結社で論客として活躍するが、連合赤軍の事件に衝撃を受けて結社を離れ、パリ滞在中に最初の探偵小説『バイバイ、エンジェル』(1979)を書き上げた。パリを舞台に謎の日本人青年矢吹駆が登場。また、綾辻行人以降の本格ミステリ隆盛期の文学的意義を「本格探偵小説の第3の波」としてミステリ史に確立するために、評論の分野でも精力的な活動を行っている。

<作家紹介>

### 岡嶋 二人

#### おかじま ふたり

プ 説家。井上夢人(本名:井上泉1950-)と田奈純一(本名:徳山純一1943-)のコンビによる筆名。筆名は、映画『おかしな二人』をもじったもの。1982年『焦茶色のパステル』で乱歩賞を受賞してデビューする。『99%の誘拐』(88)など様々な切り口から誘拐事件を描き「ひとさらいの岡嶋」の異名をとった。『クラインの壺』(89)を最後にコンビを解消した。



ひがしの けいご 1958-

/ 説家。技術者として働くかたわら、1984年 乱歩賞の最終候補となり、85年『放課後』で乱歩 賞を受賞してデビュー。『卒業』(86)では大学生、 『眠りの森』(89)『悪意』(96)では刑事となる加 賀恭一郎シリーズがある。2006年直木賞を受賞 した『容疑者Xの献身』に登場する物理学者・湯 川学を主人公とするガリレオシリーズが人気を博 す。『秘密』(98)『白夜行』(99)などドラマ化、 映画化された作品も多い。

<作家紹介>

# 綾辻 行人

#### あやつじ ゆきと 1960-

プ 説家。京都大学大学院在学中の1987年に『十角館の殺人』でデビュー。孤島を舞台にミステリ研究会の部員たちが殺されていく事件を描いたこの作品により、新本格ムーブメントは幕を上げた。この作品に登場する島田潔をシリーズ探偵とした館シリーズ、ホラーの囁きシリーズ、スプラッタ小説『殺人鬼』(90)などがある。楳図かずおを「わが心の師」として、一番大きな影響を受けたと表明している。



<作家紹介>

原一

おりはら いち 1951-

**小**説家。ワセダ・ミステリ・クラブ出身。密室ミステリの作品集『五つの棺』(1988)が東京創元社より刊行され、作家活動を開始。この作品に登場する密室マニアの黒星警部を主役としたパロディ風本格推理とともに、叙述トリックを用いて芳醇なドラマを語れる点が大きな特徴といえる。妻は作家の新津きよみ。夫婦で書いた『二重生活』(96)という作品もある。

うたの しょうご 1961-

**八**説家。編集プロダクションに勤めるかたわ ら、島田荘司のアドバイスを得ながら小説の道 を志す。探偵役として信濃譲二が登場する『長 い家の殺人』(1988)でデビュー。2003年に発 表した『葉桜の季節に君を想うということ』は、 翌年の『このミステリーがすごい!』『本格ミ ステリ・ベスト10』で1位に選ばれ、日本推理 作家協会賞と、本格ミステリ大賞を受賞した。



りんたろう 1964-

**八** 說家、評論家。京都大学推理小説研究会出身。 島田荘司の推薦を受けて、1988年『密閉教室』 でデビュー。クイーンの影響を強く受け、第2作 長編『雪密室』(89)から、クイーンの設定を踏襲 した、作者と同名の推理作家法月綸太郎を探偵役 として登場させた。作品に作者自身の本格推理に 対する懐疑が反映されるようになり、「悩める作 家」という異名をとる。『生首に聞いてみろ』 (2004) 『ノックス・マシン』(13)が『このミス テリーがすごい!』1位に選ばれている。

<作家紹介>

# 有栖川

ありすがわ ありす 1959-

1989年に『月光ゲーム』でデビュー。作者と 同名の有栖川有栖をワトソン役に、名探偵江神 二郎が活躍する。『46番目の密室』(92)より、 もう一人の名探偵火村英生が登場、こちらもワ トソン役は有栖川有栖という名前であるが江神 シリーズとは別人である。

<作家紹介>



たけまる あびこ 1962-

島田荘司の推薦を受けて、1989年に速水3 兄妹が活躍する『8の殺人』でデビュー。続 く『人形はこたつで推理する』(90)に始ま るシリーズはほのぼのとしたユーモア・ミス テリー。91年発表の『殺戮にいたる病』は 単純なサイコ・スリラーと思って読むと驚き の結末が待ち受けている。94年にはゲーム ソフト「かまいたちの夜」のシナリオを担当。

### 山口雅也

やまぐち まさや 1954-



あしべ たく 1958-

/ 説家。読売新聞に入社後、1986年に本名の小畠逸介名義で幻想文学新人賞佳作入選、90年芦辺拓名義での『殺人喜劇の13人』で鮎川哲也賞を受賞。シリーズものの著作としては、作者いわく「日本一地味な探偵」森江春策が時空や虚実までも越えた謎に挑む「森江春策の事件簿シリーズ」がある。創作以外では怪奇アンソロジー『妖異百物語』(97)『鮎川哲也読本』(98)を共同編集している。

<作家紹介>

### 麻耶 雄嵩

まや ゆたか 1969-

**八** 説家。京都大学推理小説研究会出身。島田 荘司らの推薦を受け、『翼ある闇 メルカトル鮎 最後の事件』(1991)でデビュー。本格ミス テリの「真相」という枠を飛び出したこの作品 により、新本格派の第2世代と呼ばれた。メル カトル鮎シリーズ、貴族探偵シリーズなどがあ る。



<作家紹介>

凍季

つかさ とき 1958-

/ 説家。1991年、島田荘司の推薦を受け 『からくり人形は五度笑う』でデビュー。

#### 一階堂黎人

にかいどう れいと 1959-

/ 説家。1990年『吸血の家』で鮎川哲也賞 佳作入選、92年、二階堂蘭子シリーズ第1作 『地獄の奇術師』でデビュー。才色兼備の美少 女二階堂蘭子と義兄で記述者を務める二階堂黎 人が活躍する。怪奇趣味や活劇をも盛り込んだ 過去の探偵小説への懐古性が濃厚な作風。『人 狼城の恐怖』(96-98)は世界最長の推理小説 と言われている。



きたむら かおる 1949-

√ 説家。ワセダ・ミステリ・クラブ出身。大学卒業後、教師を務めながらミステリの評論、編集などに携わっていた。1989年、覆面作家として『空飛ぶ馬』を刊行。犯罪や暴力がなくても、魅力的な謎があれば本格推理は成立することを示し、後続の作家に大きな影響を与えた。『鷺と雪』(2009)で直木賞受賞。

<作家紹介>

### 若竹七海

わかたけ ななみ 1963-

「小説家。立教ミステリ・クラブ出身。業界紙の編集部などに勤務した後、5年のOL生活を経て1991年『ぼくのミステリな日常』でデビュー。本格推理、ハードボイルド、コージー・ミステリ、ホラー、歴史ミステリと多彩な作風だが、一貫して普通の人々の日常生活に潜む悪意の存在をテーマとしている。夫は評論家の小山正。



推理作家の貫井徳郎。

<作家紹介>

納明子

かのう ともこ 1966-

/ 説家。1992年連作短編集『ななつの こ』でデビュー。女子大生の主人公が日常生 活で出逢う謎を年長者が解き明かす趣向など、 北村薫の円紫シリーズの影響が見られる。 『ささら さや』(2001)『てるてるあした』 (05)は映画化、ドラマ化されている。夫は

# **倉**知 淳

くらち じゅん 1962-

/ 説家。1993年若竹七海が遭遇した未解決事件に解決を付けるという趣向の一般公募において若竹賞受賞。94年『日曜の夜は出たくない』でデビュー。傍若無人ながら憎めない自由人、猫丸先輩が、飄々とした態度で謎を解く。2001年『壷中の天国』で第1回本格ミステリ大賞(小説部門)受賞。



樹静子

なつき しずこ 1938-

小説家。大学在学中から、乱歩賞の最終候補となり、NHKの推理番組「私だけが知っている」のライターとなった。1970年処女長編『天使が消えていく』から本格的に作家生活を始めた。初期は見事な小説技巧と、推理小説の特質であるパズル的興味や意外性が特徴的であるが、のちに綿密な取材による幅広い社会的な主題に取り組んだ。エラリー・クイーンと親交があり、多くの作品が海外で翻訳されている。

<作家紹介>

# 森村誠一

もりむら せいいち 1933-

